

選者サイトで作品を選ぶときには、作者の名前や年齢は表示されませんので、あくまで作品本位で選びます。作者の年齢や境遇を想像しながら選んでいますが、やはり年齢や人生経験によって味わいが違います。後でそれらが分かったとき、納得したり感心したりするということがしばしばです。

今月気になった詩句を選んでみました。

胸をおおう下着を
買ってくるたびに
貯まるかわいい紙袋たち
作者 高良真実

—胸のときめきが聞こえるような、まったくかわいい作品。

いちめんの
ひまわり畑を
掻き分けて、掻き分けて、
いつまでも暗い
作者 西春奈

—元気と明るさの象徴のようなひまわりですが、ポジティブだけしか肯定しない現代の暗さも感じさせます。

屋号で呼び合うが
みんな閉店した商店
作者 加藤 美紀

—商売の屋号がアイデンティティであった人がそれを失ったときの空虚感。

じゃあお母さんが

おにんぎょう役ね

作者 うすしか

——この場面は様々なことを想像させます。自立していく子との立場の変化、また老いた親の介護の現場などを想起させ、言葉の力を感じます。

卒業アルバムで

笑ってる方の佐藤が

死んだ方の佐藤

作者 うすしか

——クラスに佐藤さんが複数いたのでしょう。「笑う」と「死ぬ」という二つの動詞が分ける運命が衝撃的です。わずか3行で感じさせるドラマ。

貝柱から自由になりたい

作者 暮田真名

——二枚貝が持っている強力な防御装置「貝柱」ですが、防御はときに自分自身を縛ることも。

太鼓でもあり鈴でもある

タンバリンは

愉快的楽器なことだなあ

作者 春町 美月

——身近なものを見る新鮮な角度と、人生の充実期の心の余裕も感じさせてくれます。

爪のあいだの黒い土

気づけば呼吸が

緩んで深い

作者 春町 美月

——土いじりは心と身体を共に癒してくれます。緩んで深い呼吸にそのことを感じました。

あなたの正義は

あなたが気分良くいられる事が

前提よね

作者 淡路なると

——「〇〇警察」というような「正義」を前面に押し出した抗議が叫ばれる現在です。それが本当に正義なのか。

死んでいる

死んでいる

死んでいる

お医者さん

作者 ウラン238

——コロナ禍の中でリスクを背負い、次々に倒れるのは医療従事者の人たち。感謝あるのみです。医療が専門化する中で、「お医者さん」という親しみを込めた呼び方が医療の本質を改めてよみがえらせてくれます。

ときどきは

還れなくなることもある

荒野で

葬儀の列に

まじれば

作者 佐藤 美貴子

——幻想的な作品です。人生には、あちらの世界へ誘うような「葬列」にふっと紛れ込んでしまうような瞬間があることも。

山肌に墓石ささっている四月

作者 長谷川柊香

——「ささる」という動詞が作る鮮やかな映像。刺さるのが「墓」であるという動と静の対比が面白いですね。